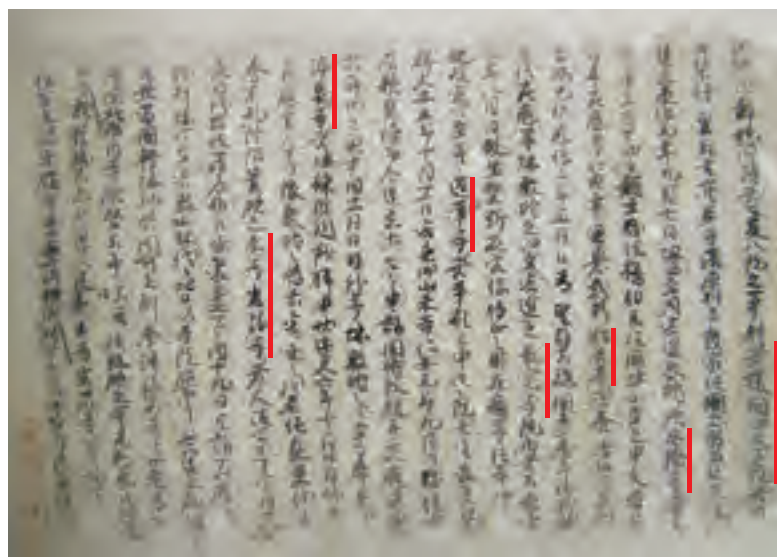


白山中宮八院の成立と安元事件

白山信仰の発展にともない白山登拝

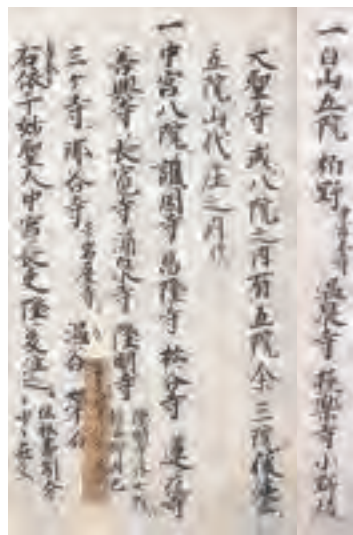


元徳2年(1330)閏6月 白山中宮八院衆徒等申状案(部分)(横浜市 称名寺所蔵／神奈川県立金沢文庫保管) 護国四天王院・昌隆寺・松谷寺・長寛寺・蓮華寺・涌泉寺・末寺岩蔵寺八院の草創について記すが、善興寺・隆明寺はみえない。国守・目代・在庁官人が願主となり、建立や寺地が寄進されている。涌泉寺の敷地国免は、建久6年(1195)10月とする。

の拠点加賀馬場が形成され、白山本宮(白山宮・現、白山比咩神社)が中心の本宮四社に対し、中宮を中心とする佐羅宮・別宮は中宮三社と称し、双方独自に発展しながら連携もあつた。白山宮は久安三年(一一四七)延暦寺の末寺となつている。涌泉寺など八か寺は、国衙に對峙する形でその東南に位置し、白山中宮八院といわれ(『白山之記』では中宮八院)、十二世紀中頃には中宮末寺として成立していた。中宮は能美・江沼両郡に宗勢を伸ばし、勢威を誇っていた。

安元元年(一一七五)十二月、加賀守は加賀の知行国主藤原基家の子保家から、後白河法皇の寵臣西光(藤原師光)の子藤原師高に交替した。後白

河法皇は平家準一門から加賀の知行権を奪回したのである。師高は、加賀の寺社・権門領に対し非法を重ねていた。翌年の夏、師高の弟師経が目代(代官)として加賀国衙に入つて間もなく、白山中宮八院の一つ鷺川の涌泉寺の検注(立入検査)を実施しようとして入部したが、寺僧の激しい反発をうけたことから、軍勢を率い涌泉寺を焼打ちした。当時涌泉寺の寺地は国衙の免税地でな



国指定重要文化財「白山之記」(白山市 白山比咩神社所蔵) 長寛元年(1163)ころ成立と推定される白山宮最古の縁起。



『平家物語絵巻』巻第一下「鷺川合戦の事」(部分)(岡山市 (財)林原美術館所蔵) 検注のため涌泉寺に立ち入った加賀国の目代藤原師経は、湯屋にまで押し入り、師経みずから湯浴みをし、さらに馬をも洗わせた。寺僧たちは、昔よりこの寺は国衙役人が入部することはないと横暴の停止を求めたが、師経は聞き入れず、憤慨した寺僧は師経秘蔵の馬の足を折り、師経方と寺僧の間で射あい斬りあう乱闘となり、師経方は敗色が濃くなって退散した。この後、師経は涌泉寺を焼打ちする。

く、目代師経が白山勢力の削減をはかる意図とはいえ、検注それ自体は不法とはいえないが、白山権現に挑戦するかのうに焼打ちにいたっては、まさに暴挙であつた。

涌泉寺から通報をうけた中宮は、白山中宮三社八院の衆徒を結集し、惣長吏智積・覚明らを張本に大挙して国衙を襲撃したが、目代師経は京へ逃亡した。翌年正月、国衙側の制止をふりきり白山中宮三社八院の衆徒は、佐羅宮早松社の神輿を奉じ、師高・師経兄弟の処罰を勝ちとるため、本寺延暦寺の支援を求めて上洛することになる。

四月延暦寺の主導のもと、日吉七社・早松社の神輿を奉じた、延暦寺・白山中宮三社八院の衆徒は後白河法皇に空前の強訴を展開し、師高・師経の流罪が決定した。その後強訴の張本として天台座主明雲は解任・流罪となったが、



『源平盛衰記』巻四「白山神輿登山ノ事」(金沢市立玉川図書館所蔵) 白山中宮の衆徒が延暦寺に訴えんと、佐羅宮早松社の神輿を奉じて発向した様子を記す。

延暦寺衆徒は流罪途中の明雲を奪還し、六月一日平氏打倒計画が発覚し(鹿ヶ谷事件)、西光父子は殺害された。

加賀守師高・目代師経と白山中宮三社八院との対立に発した安元事件は、後白河法皇と平清盛との対立激化など中央政界を揺るがした。(清水郁夫)

安宅の合戦から篠原の合戦へ

治承四年（一一八〇）源頼朝・木曾義



『源平盛衰記』巻二十八 北国所々合戦事(金沢市立玉川図書館 村松文庫)
寿永2年(1183)5月2日、加賀・越中両国武士団は安宅の渡りに城を構えた。平氏軍先陣平盛俊勢が押寄せ、双方川を隔てて遠矢を射、河中でも戦ったが、平盛俊勢は渚を渡った。

仲が相ついで挙兵し、これを契機に全国的規模の反乱が起き、この源平の争乱は治承・寿永の内乱ともいう。

義仲が養和元年（一一八二）中頃より越後に勢力を伸ばすにつれ、加賀・能登・越前の平氏知行国や越中でも、義仲に呼応する在地武士の反平氏の蜂起が続発した。

寿永二年（一一八三）四月、北陸道制圧のため北陸道追討使平維盛らをおとす平氏軍一〇万騎は北陸道に進撃し、義仲の指令をうけた越前・加賀・能登・越中の北陸武士軍が籠る越前燧城をおとし、五月加賀に入った。

富樫宗親・家経、林光明・倉光成澄・井家範方ら加賀武士軍と越



『義仲勲功図会』(石川県立図書館所蔵) 寿永2年6月1日、安宅の合戦での義仲(右の武将)の勇姿。



斎藤別当実盛奮戦図絵馬 尾形直実画(白山市 若宮八幡宮所蔵)
篠原合戦で、平氏軍が落ちていくなかで、ただ一騎踏みとどまって奮戦した斎藤別当実盛を描く。

中武士軍は、篠原から安宅の渡りに後退し、城を構え梯川にかかる橋板をおとして応戦したが、渚を渡った平氏軍先陣の平盛俊勢五〇〇余騎に圧倒され退却した。この時北加賀の井家範方一党一七騎は根上の松で討死している。

加賀を制圧した平氏軍は越中・能登に進んだが、間もなく越後から越中に南下した義仲軍は、越中に逃れていた北陸武士軍を結集し、五月十一日越中・加賀国境の倶利伽羅合戦と、翌日越中・能登国境の志雄山合戦で平氏軍を撃破し、ここに戦局は逆転する。

六月一日敗走する平氏軍を義仲と叔父源行家軍五万余騎は、安宅・篠原で追撃した。義仲軍には林・富樫・倉光・下田などの加賀武士や信濃・越中武士も加わっていた。安宅では平氏軍は橋を引いており、義仲の命をうけた林光明の瀬踏みで源氏軍は一気に梯川を押し渡った。源平双方軍勢をくりだし激戦を交えたが、やがて源氏軍は全軍総攻撃を展開し平氏軍を粉砕した。

平氏軍は篠原に退いたが、この篠原合戦は壮絶を極め、『源平盛衰記』は、「馬ノ馳違音、矢叫ノ声、雲モ響地モ動クラント覚タリ」と記す。戦いは暮色迫るころには決し、平氏軍は総崩れとなって敗走した。その中で、篠原にただ一騎踏みとどまり奮戦した斎藤



国指定重要文化財 木曾義仲奉納の伝斎藤別当実盛着用の兜(小松市 多太神社所蔵)

別当実盛は、赤地の錦の直垂に黒糸威の鎧をつけ、白髪を黒く染めていたという。しかし信濃の武士手塚太郎光盛に討たれ悲壮な最後を遂げた。

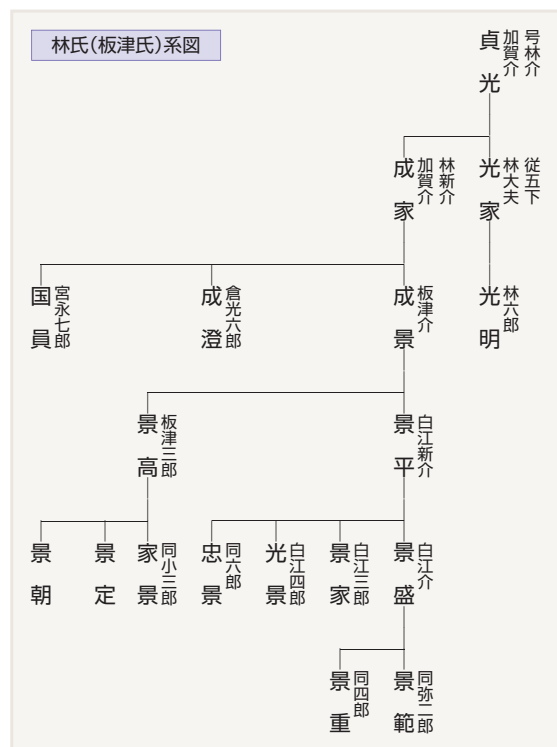
この安宅・篠原の合戦で、平氏軍は壊滅的な敗北を喫し、その後帰京したのは、三万余騎に過ぎなかったといわれる。

(清水郁夫)

鎌倉幕府と加賀国衙こくが

寿永三年（一一八四）正月、源義仲が
 源頼朝の派遣した源義経と戦い、近江
 国粟津で敗死すると、頼朝の乳母比企
 尼あまの一族である比企朝宗ともむねが、鎌倉殿（頼
 朝）かんのうし勸農使として、北陸道諸国に派遣
 された。勸農使の任務は、国衙機構を

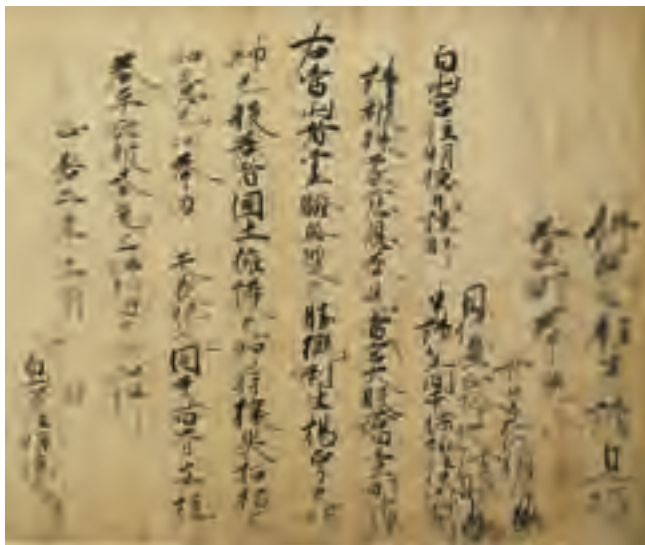
方で、義仲与党の謀叛人跡の追跡調査
 を行い、その所領を没収するなどして、
 占領地の復興をはかることであつた。
 同年五月、**朝宗**が、**加賀国留守所**
 (国府の政庁)の**在庁官人**(国府の役人)



臣（実名不詳）とともに、源頼朝の命令を承けて、同国白山本宮に平家追罰の目的で石川郡宮丸保を寄進したのは、その一斑である。

大江氏は、平安末期に、江沼郡の惣郡司職や郷司職をおさえる在地領主で、平安末期の大治二年（一二七）八月、白河法皇領の江沼郡額田荘の寄人のなかに、案主大江経定と番頭の大江公政がみえ鎌倉中期の正嘉二年（一二五八）三

中世小松市域周辺の荘園・公領分布図



正嘉2年3月「白山本宮住人明德丸申状」(京都市 南禅寺所蔵) 外題に、当時加賀の留守所で国務にあたっていた、目代(法眼某)と書生(大江某)の免許の証判がみえる。

月には、加賀国衙の書生しよしように大江朝臣がしられた。

額田荘は、能美郡境の荘園で、現在の小松市月津地区から加賀市動橋町・庄町付近に至る、動橋川下流域の江沼平地北東隅一帯に比定できる。

また橘氏は、平安中期の承保二年（一〇七五）、橘朝臣某が、能美郡軽海郷に所在する白山中宮八院のうちの昌隆寺の寺地を寄進したと伝えられる。さ

文治二年（一一八六）九月、源頼朝は、額田莊領における板津介成景らの押妨と、比企朝宗の代官平太実俊（い）たさねとしによる同莊領南境の侵犯、加藤次成光かとうじが地頭と号して乱行に及んだ行為を止めさせた。成景は能美郡板津莊（現能美市根上地区周辺）を本拠とした加賀の有力武士団林氏一族の御家人で、成光もその一門の可能性があり、勸農使朝宗

らに鎌倉後期の弘安元年（一二七八）、橘はねだのすけ（埴田介）成清が、能美郡能美荘の惣公文職に補任され、永仁五年（一二九七）二月には、成清の子息成政が、加賀国八幡宮神主職の地位と、同郡得橋郷長恒ながつね名内みなうちの荒木田・佐々木（現小松市域）などの田畠・屋敷を、鎌倉幕府から安堵されており、能美郡の国衙近辺を領主的基盤としていた。

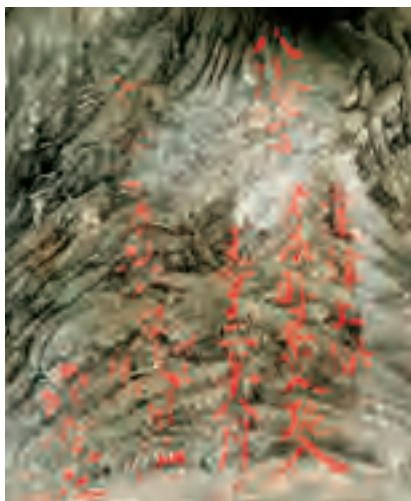
加賀の政治支配の拠点であつた中世の国衙所在地は、能美丘陵西南端の梯川中流域右岸にあたる現在の小松市古府町・小野町付近と推定され、近傍には、加賀国の惣社である得橋郷内の府南社や国分寺も所在した。

の代官と結んで濫妨に及んでいた。

成景の家系は、その後、梯川下流域の能美郡白江保を拠点とした白江氏と板津氏の能美郡の両家に別れたが、ともに「景」を通字としたことから、同郡粟津上保の八幡宮に奉納された、元亨二年（一三三二）八月の紀年銘を持つ木造獅子頭（国指定重要文化財）の施主としてみえる景久（姓 かげひさ）も、成景流の林氏一族であったと思われる。



2年8月在銘の「木造獅子頭」
（市津波会町 津波会神社所蔵）



元亨2年8月在銘の「木造獅子頭」
(小松市津波倉町 津波倉神社所蔵)
左写真は上顎内側に記された銘文。

称名寺領軽海郷の世界

鎌倉時代末期の嘉暦四年（一二三九）二月、幕府は武蔵国称名寺に、加賀国能美郡軽海郷の地頭職を寄進した。以後、南北朝時代終わり頃の永徳三年（弘和三年、一三八三）まで、建武政権期の一時中断をはさむ約半世紀の間、称名寺は地頭として軽海郷を支配した。軽海郷は、平野部・山間部を含めて

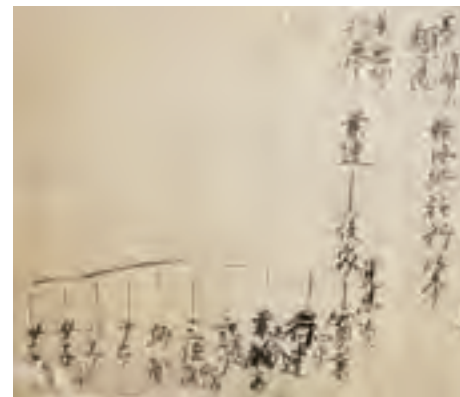
総田数六四町八反余であったが、近辺の国衙（国の役所、現在の古府町付近）の南側にあって加賀国惣社とされた府南社（現、古府町の石部神社と推定）が六割近い田地を押領、また郷内に所在

した白山中宮（現、白山市中宮町筭笠中宮神社）の末寺である八院（隆明寺・涌泉寺・長寛寺・善興寺・松谷寺・護国寺・昌隆寺など）も二割近い田地を押領しており、支配回復のため称名寺の経営は当初から困難を極めた。軽海郷は大きく、本郷・大野村・河内分の三領域から編成され、史料では

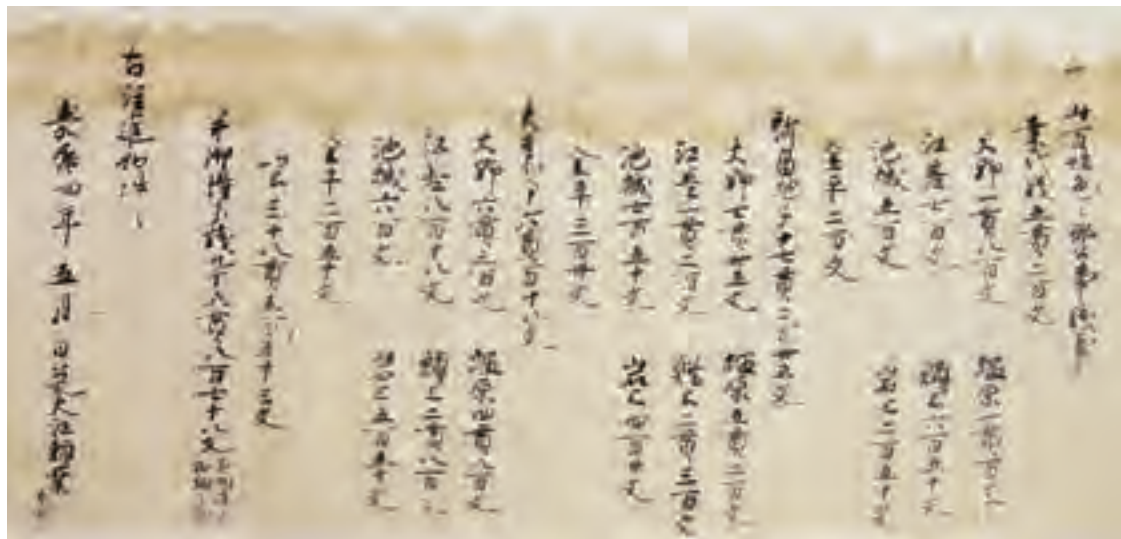
軽海郷の領域と地名分布



軽海郷の領主であった称名寺（横浜市、真言律宗）
称名寺は執権北条氏の一族金沢氏の菩提寺となった律宗寺院（西大寺末）であり、多数の和漢籍を蒐集した金沢文庫でも著名であった。



「軽海郷相伝知行次第」(称名寺所蔵／神奈川県立金沢文庫保管)
承久の乱(1221)以前軽海郷の地頭は頼高(姓不詳)、乱の勲功で行忍が地頭職を得て、子孫に継承していた状況を示す。行忍の曾孫にあたる実業の時、地頭職が欠所となり、称名寺に寄進された。



嘉暦4年(1329)5月「軽海郷田数得分等注文案」(部分)(称名寺所蔵／神奈川県立金沢文庫保管)
「山百姓」の「色々御公事銭」に大野と河内分の村々の地名が見える。

本郷に中村・市・かま神社森・清水寺谷口、河内分に金平・岩泉・塩原・池城・岩上・江差・鱒上・はさ羅・前谷口・よき滝・長原・長谷・小谷・十二加滝などの地名が見える。なお地頭政所は大野村の藤七大夫名内に所在し、その近辺に称名寺の在り、末寺金剛仙寺も所在したと推定される。

平野部の本郷の田地は一色田と称される米納の散田（百姓に請作させる領主直営地）が中心で、山間部の大野村と河内の田地は百姓が年貢（銭納）と公事（ほとんど銭納）を負担する「名」で構成されていた。本郷の百姓は「里百姓」、大野村と河内分の百姓は「山百姓」と区分され、山百姓は桑代綿（真綿か）・苧・漆・紙・油・胡麻・栗・薪・炭などの雑物も納入していた。

称名寺にとって軽海郷は諸国所領収入の中で大きなウエイトを占めたが、南北朝時代、戦乱



郷谷川にかかる現在の十二ヶ滝
「軽海郷百姓交名注文」(年未詳、金沢文庫文書)に郷内の河内分の地名として見える。

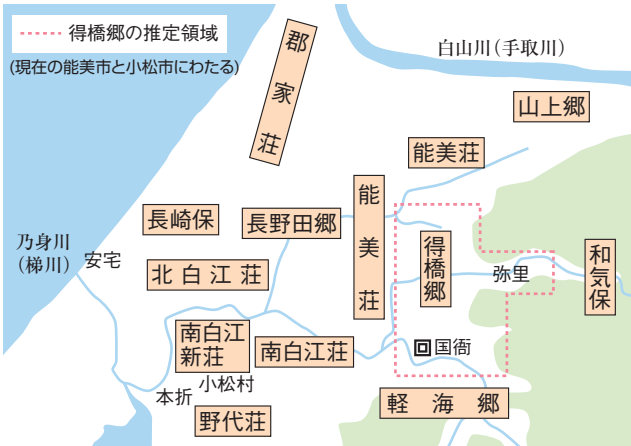
や守護富樫氏の領国形成に伴う兵糧用途の支出等が経営を悪化させたため、幕府と交渉し、康暦二年（一三八〇）、ついに幕府官僚町野長康の上総国（現、千葉県）の所領との交換が認められた。

（室山 孝）

能美平野の莊園

中世の能美平野に立地した莊園の主なものとして、東に得橋郷、北に郡家荘（板津荘）、中央に能美荘、西に南・北白江荘があり、主に梯川上流

能美平野の莊園分布



このほか、木場潟の南側に、粟津保（津波倉町・粟津町・戸津町付近）、柴山潟周辺に、佐美保（佐美町付近）、額田荘（額見町付近）、八田荘（矢田町・矢田野町付近）などが知られる。

谷あいには展開した軽海郷の本郷が平野部南縁を占めていた。ここでは主に得橋郷について紹介しよう。

得橋郷は、正安四年（一三〇二）、鎌倉幕府が亀山法皇に寄進し、同年（乾元元年）末、法皇はこれをさらに南禅寺に寄進した。その領域は、北は現在の能美市牛島町・佐野町付近から、南は小松市古府町（国府所在推定地）を越え、梯川（中世史料では「乃身河」と表記）南岸の小松市佐々木町・荒木田町付近まで南北に長く続き、小松市上八里町・下八里町付

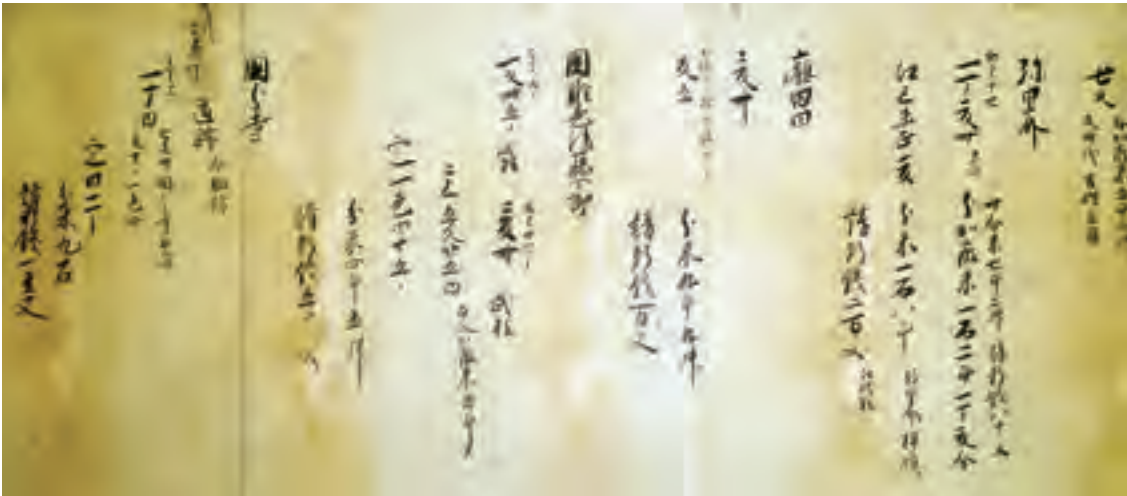


得橋郷の領主であった南禅寺（三門、京都市、臨濟宗）

南禅寺は、臨濟禅に帰依した亀山天皇が正応4年（1291）離宮禅林寺殿を禅寺としたことに始まり、規庵祖門が入寺して伽藍造営にあたり、寺号も南禅寺と改められた。建武元年（1334）、五山の第一位、至徳3年（1386）、五山の上となって、禅宗寺院の最高位に置かれた。三門は、江戸時代の寛永5年（1628）、藤堂高虎の寄進によって再建されたもの。

近で東に突出していたらしい。

延慶二年（二三〇九）の内検名寄帳（土地台帳）によれば、得橋郷は、本



延慶2年6月「得橋郷等内検名寄帳」（部分）（京都市 南禅寺所蔵）に見える小松の地名

最初の「弥里介」は現在の上八里町・下八里町付近を拠点とした豪族で、国衙（国の役所）在庁（在地任用の有力官人）と推定される。小さく書かれた土地の所在表記は、「六里十七（坪）」のように、条里制が用いられている。「庁内田」は国衙敷地内に所在した田地で、「国雑色」とは国衙の下級役人である。「国分寺」が見えており、古代の加賀国分寺が、この頃大和国西大寺末の律宗寺院として再建されていたと推定される。

郷（牛島村）、北佐野村、南佐野村、佐羅村（位置不詳）と、得南・益延・長恒の三名から編成され、総田数二〇四町二反余にのぼる。三名は梯川を越えた左岸と推定され、荒れた国衙（国の役所）領であった所に得橋郷の住人が出作して既成事実を重ね、国衙に得橋郷の一部と認めさせたいいわゆる加納の地であり、徳治三年（一二三〇）に南禅寺に寄進されたものであった。長恒名は現在の荒木田町付近である。国衙の南方に加賀国惣社であった府南社（現在の古府町石部神社が後身か）があり、神主職は元亨元年（一二三二）に南禅寺に寄進された。一方で、佐羅村をめぐる白山中宮佐羅別宮勢力や山



南・北白江荘の領主であった妙法院の現在（京都市、天台宗）

南・北白江荘は、梯川下流域に成立した荘園で、文永5年（1268）、延暦寺東塔領として初見。その後天台妙法院門跡が管轄した。室町時代、幕府奉公衆の一員西郡氏がおそらく北白江地頭職を知行し、大洪水の被害を受けた加賀国安国寺の代替用地をめぐる論議もあった。なお、「尊卑分脈」（藤原時長孫林氏）によれば、平安時代末頃に実在した板津介成景の嫡子に、白江新介景平の一族が見え、白江荘を開発本領とする武士団と推定され、国衙在庁を示す「介」の地位を継承していた。また戦国時代までに新たに南白江新荘が成立し、天文5年（1536）、新荘内に小松村が初見する。今の小松市のルーツである。

内荘地頭吉谷氏との相論、白山造宮段米賦課の停止をめぐる訴訟など、当初から南禅寺の経営は多難であった。室町時代から荘園経営にたけた禅僧が代官となって公用（定額年貢銭）請負が行われたが、戦国時代後期は一向一揆の時代を反映して、本願寺関係者が代官をつとめた。（室山孝）

多田八幡別宮と乃身莊

小松市上本折町の多太神社は、鎌倉期には「能美の八幡」とも称され、加賀国の有力八社の内にかぞえられていた。鎌倉末期の永仁二年（一二九四）九



加賀国八幡別宮の由緒をもつ多太神社の社頭景観（小松市 上本折町）

月十七日、橘成政は、加賀国八幡宮神主職並びに同敷地などを、父の埴田介成清と母の妙蓮尼から譲渡されており、神主職に社領の乃身莊、敷地には米丸名が付随していた。



国指定重要文化財『白山縁起』国八社の部分（白山市 白山比咩神社所蔵）

加賀国八幡宮は、石清水八幡宮が諸国に分霊を祀った、「八幡別宮」の内社の社で、石清水八幡宮と八幡別宮の間には本末関係が成立し、平安末期の保元三年（一一五八）頃は、一八か国三五社が知られ、鎌倉期になると六〇余社に及んでいた。

乃身莊は、加賀の八幡別宮が領家で、文永六年（一二六九）三月、先に殺害された暹覚の後家（平氏女）が、夫に代わって惣公文職に補任されていた。しかし翌七年には、多年にわたり鎌倉に赴いていた暹覚の訴訟費用の借財を精算するため、後家が惣公文職と田畠を、弥里氏に銭一二〇貫文で売却した。弘安元年（一二七八）八月になると、埴田介成清が惣公文職に補任され、南北朝初期の建武二年（二三三五）には、

吉良省観（貞義）が後醍醐天皇から

恩賞として、乃身（能美）荘の地頭職を与えられたが、翌三年六月、省観は同職を石清水八幡宮に寄進した。このとき同荘の惣公文は八幡尚成であった。ついで南北朝前期の観応二年（一二三二）六月には、橘成秀が介二郎（実名不詳）に、所領の能美郡多田八幡別宮領乃身莊（小松市能美町付近）の敷地等を譲渡している。

橘姓の埴田介は、本領の地名ブラ

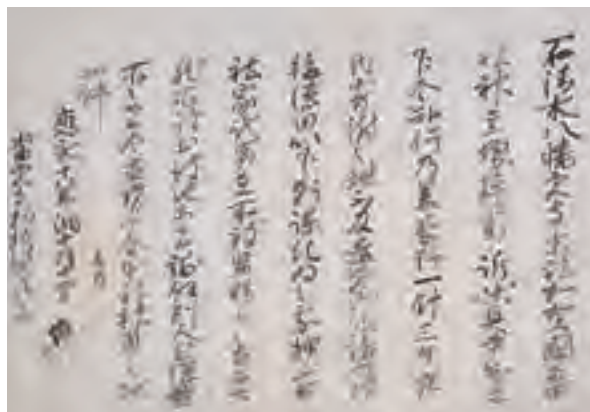
ス「介」を僭称した左官人の家系で、

弥里・八幡両氏も介を称しており、八幡氏は、埴田氏とは同族であろう。また多田八幡別宮の呼称は、古代延喜式内社の多太神社に、中世になって八幡宮が勧請・合祀された由緒によったものと思われる。

室町前期の応永四年（二三九七）十一月、多田八幡別宮領の成覚が、知行していた田地三町七段二〇代と屋敷等を、禅僧の養子（名不詳）に譲っており、同十八年（一四一一）閏十月



建武3年(1336)6月6日付「吉良省観地頭職寄進状」(京都府八幡市 石清水八幡宮所蔵)



応永18年(1411)閏10月14日付「足利義持御判御教書」(京都府八幡市 石清水八幡宮所蔵)

には、將軍足利義持が、石清水八幡宮の末社であった在地の加賀国多田社（八幡別宮）神主の狼藉停止を沙汰している。

狼藉の内容は、神主が石清水八幡宮の造営に協力せず、隠田を抱え込んでいたため、同宮の社家方代官が、それを摘発したところ、神主等が代官の在所へ押し寄せ、濫妨に及んだものであった。そのため幕府は、神主の知行分である乃美・長野・一針三莊（能美三个莊）内の寄進地を没収して別人に与え、隠田については、神主の狼藉を訴え出た石清水八幡宮に、直務支配をさせることにした。

（東四柳史明）



多田八幡別宮の本社である石清水八幡宮の社頭景観（京都府八幡市）

中宮八院と那谷寺の盛衰

鎌倉時代末期の元徳二年（一二三〇）閏六月、白山加賀馬場の中宮の傘下にあった、能美郡軽海郷付近に所在する

別院八カ寺（白山中宮八院）の衆徒等が、同郷の代官堯観の横暴を朝廷に

訴えた。それは前年に軽海郷が武蔵国金沢（現横浜市金沢区）の称名寺領となり、堯観が代官として現地に乗り込

中宮八院推定地の位置



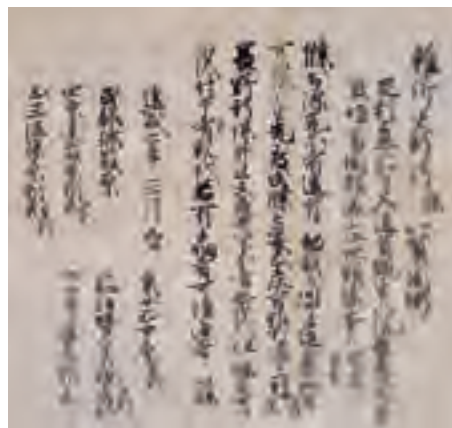
『加賀国府と中宮八院』小松市教育委員会編に拠る。国土地理院発行2万5000分の1地形図（小松、平成13年・別宮、平成9年）を使用



白山加賀馬場の中宮勢力の伝統を継承する「那谷寺」大悲閣拝殿

み、八院とその末寺の岩蔵寺の従来からの寺域を乱したためであった。

その濫妨停止の勅裁を求めた申状によれば、八院の創建や寺域の成立時期が語られており、十一世紀後葉から十二世紀末に、加賀の国守や目代・在庁官人等が敷地や山林を寄進し、国衙がそれを公認して、寺院の基礎が固められていた事情がうかがわれる。中宮八院は、軽海郷内の護国寺・昌隆寺・松谷寺・蓮花寺・善興寺・長寛寺・涌泉寺の七カ寺と周辺部に所在した隆明寺から構成され、能美・江沼両郡の南加賀を信仰圏とする白山中宮勢力の主力をな



建武2年3月5日付雑訴決断所牒案(京都府八幡市 石清水八幡宮所蔵)

しており、他に「白山五院」「三个寺」など、江沼郡に分布する中宮の末寺も知られた。

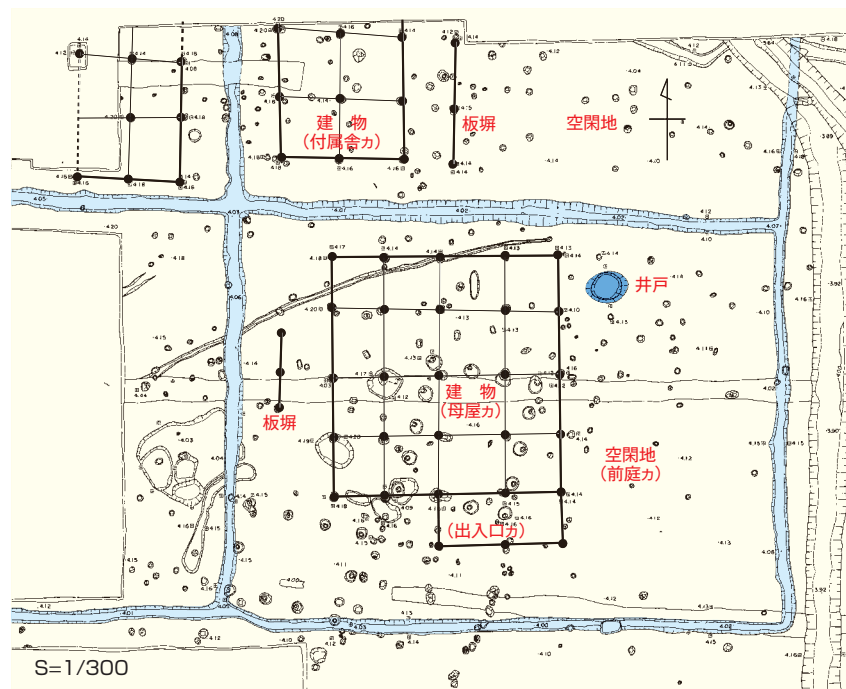
一七六 八月、加賀の目代藤原師経が、国衙近傍の中宮八院の一つである涌泉寺を焼打ちした事件は、やがて八院衆徒の国衙襲撃に発展した。師経の兄で加賀の国守である藤原師高の断罪を要求する衆徒等は、白山麓の佐羅早松社の神輿を奉じ、比叡山延暦寺の衆徒の支援を得て、京都に強訴に及んだ。こうした中宮八院の勢威も、南北朝期には次第に衰え、建武二年（一二三三）三月には、建武政権の訴訟機関（雑訴決断所）が、中宮長吏源光等の能美莊進出を、濫妨行為として退けていた。ついで康永年中（一二三二～四一）に至り、八院は没落する。その事情は定かでないが、八院の衆徒等が、内乱の過程で南朝方に味方したのが原因とされている。しかしこのとき中宮系寺社の中で、江沼郡三个寺の内的那谷寺だけが、内乱の当初より足利尊氏方北朝に属し、南朝と結ぶ八院方攻略に戦功を立てており、その恩賞として八院所縁の軽海郷の知行を望み、同郷の領主称名寺を慌てさせていた。



文明4年5月3日付那谷寺本泉坊全尊置文案(京都大学総合博物館所蔵)

那谷寺は、没落した八院等の遺産を継承して、中宮勢力では唯一その後も存続・発展することになり、天台宗を離れて、真言宗の山城観勝寺や醍醐寺金剛王院との関係を深めている。また長禄三年（一二五九）三月晦日、火災に遭ったのが知られるほか、室町・戦国期に、同寺の子院として本泉坊・華王院・福蔵坊・宝光院・明王院がみえ、戦国期には、観音深秘の霊場で、瑪瑙の産出地となっていた。（東四柳史明）

莊園の村里と武士の館



鎌倉時代の宅地図(佐々木ノテウラ遺跡) 能美荘内で発見された自作農クラスの宅地は、方形に区画された敷地(面積約100坪)に母屋、井戸、前庭などが配置されていた。

鎌倉に幕府が開かれ能美郡の武士達で、鎌倉や京に出仕すると、加賀の政治拠点であった国衙の館には、国司の代官などが赴任し、公領や荘園の村里を支配していた。その国衙に程近い梯川の流域では、農村の風景が広がり、板葺きの建物からなる村里や武士の館(屋形)が、田畠の中に散在していた。佐々木ノテウラ遺跡の宅地



大型建物の発掘(三谷大谷遺跡) 平地が少ない木場潟の東岸では、鎌倉時代の開発領主クラスの大型建物(6間×5間)は丘陵の谷間に設営されていた。

は、得橋郷の条理区画に沿った家並みで、中規模の建物や井戸からして自作農の居宅とみられる。



白江の堀割と宅地(白江梯川遺跡) 白江町の遺跡からは、幅2.5mの堀跡や一辺約60m規模の居宅が発掘され、在地領主の館と職人が暮らす町場の営みが知られた。

属の建物が営まれていた。鎌倉時代に農業用水が得やすい谷戸を開発した有力者は、集落から離れた耕作地の一角に大型住居を単独で構えることで、家族や使用人と暮らしていた。南北朝時代の頃から、荘園の代官や有力名主であった武士の館に堀割が設けられる。堀割の規模は白江梯川遺跡で幅二・五、佐々木アサバタケ遺跡では幅二と違いがあり、その規模は経済力や権力が反映した防御施設とみられている。

白江梯川遺跡は、能美郡で最大の中世村落で、白江氏の居館とみられる東西約六〇の宅地を中心に、多くの家屋が営まれていた。川舟が停泊した岸辺には、小型の建物や作業小屋が集まり、下駄や曲物などの木工職人のほか、織物や醸造業者の活動がみられる町場が広がり、白山信仰の御正体を祀る祠も置かれていた。

戦国期、本折の多太神社の近くでは、小鍛冶や絹生産の職人が活動した町場の形成が進み、本折三日市と呼ばれていた。

(垣内光次郎)



多太神社近くの町場(幸町遺跡) 北陸道が通過する上本折町から幸町に広がる遺跡で、戦国時代に鍛冶職人などが活動した町場とみられている。

半国守護と守護代本折氏

南北朝初期の建武二年（一三三五）九月、富樫高家が足利尊氏から勲功の賞

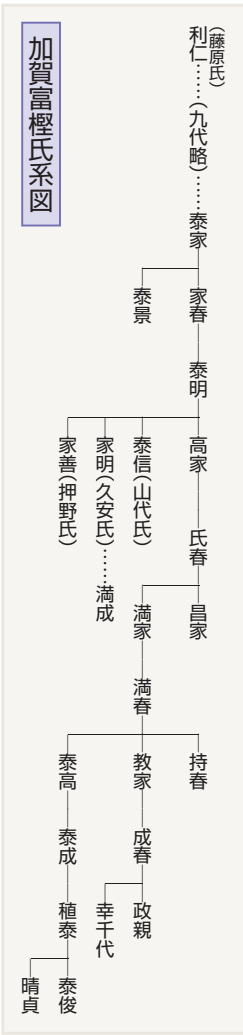
として加賀守護に補任された。その後、氏春・昌家と三代約五〇年間にわたり、

室町期の加賀国守護補任表

斯波義種	？←明徳4(1393)・7・10——応永15(1408)・2・2
斯波満種	？←応永15(1408)・2——同21(1414)・6
富樫満成(北半国)	
富樫満春(南半国)	応永21(1414)・6・8——同25(1418)・11・22
富樫満春	応永25(1418)・11・22——同34(1427)・6・9
富樫持春	応永34(1427)・6——永享5(1433)・⑦・10
富樫教家	永享5(1433)・⑦——嘉吉元(1441)・6・18
富樫泰高	嘉吉元(1441)・6——文安4(1447)・5
富樫成春(北半国)	文安4(1447)・5・17——長祿2(1458)・8
富樫泰高(南半国)	文安4(1447)・5・17——寛正5(1464)・8・7
赤松政則(北半国)	長祿2(1458)・8・30——文明初年(1469)頃
富樫政親(南半国)	寛正5(1464)・8→？
富樫政親	？←文明6(1474)——長享2(1488)・6・8(または9)

○付数字は閏月を示す（『書府太郎・下巻』北國新聞社刊に拠る）

富樫氏の守護支配が進展したが、昌家の死後、室町幕府管領、斯波義将の弟義種に、守護の地位が移った。やがて室町前期の応永二十一年（一四一四）に至り、斯波氏に代わって富樫嫡流の満春が能美・江



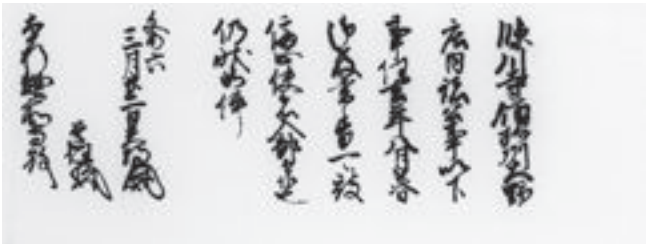
沼の南加賀二郡、將軍足利義持の近習であつた庶流の満成（久安氏）が、石川・河北の北加賀二郡のそれぞれ加賀の半国守護に補任され、富樫一門の失地回復がはかられた。このとき南加賀



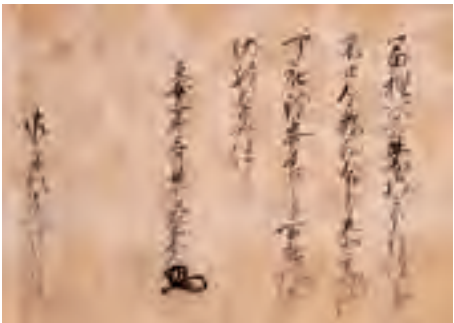
中世に北陸道筋の本折村鎮守であつた本折日吉神社(山王社)

の守護所がどこに置かれたかは定かでないが、以後、当市域の本折村を出身地とする本折氏が、富樫氏の有力被官としてみえることから、北陸道の要衝で南加賀流通の拠点でもあつた、能美郡本折付近（現小松市街地）に所在した可能性が高い。

応永二十五年十二月、北半国守護の富樫満成が將軍義持の怒りを買つて逐電すると、南半国守護であつた満春は、その地位を受け継ぎ、加賀一國守護となつた。やがて守護職を継いだ満春の嫡男持春が、二一歳で死去する



文安6年(1449)3月22日付加賀北半国守護富樫成春書下(京都市 天龍寺所蔵) 守護代となつた本折越前守に充てた



文安3年(1446)3月27日付室町將軍家御教書(国立公文書館所蔵) 細川勝元が富樫成春・本折以下の討伐を命じた。

と、持春の弟教家（満春次男）が守護に就任した。しかし教家も、嘉吉元年（一四四二）六月に、將軍足利義教の逆鱗に触れて失踪したため、醍醐寺三寶院の稚児となつていた教家の弟慶千代丸が、管領細川持之を烏帽子親として還俗し、泰高と名乗つて守護に就任した。ところがその六日後に、將軍義教が京都の赤松満祐邸で殺害されたため、出奔してゐた教家が、幕閣の重鎮である畠山持国を頼んで加賀守護への復帰を企てることになる。同年十二月になつて、教家方の主力をなす本折但馬入道父子の軍勢が、京都から加賀に攻め入り、泰高方の在国の守護代山川家之勢と三度合戦に及び、激しい攻防を繰り返したが、やがて山川方が勝利し、本折父子の加賀入国作戦は頓挫した。

ついで文安二年（一四四五）三月、細川勝元が管領に就任すると、翌四月、泰高が守護に復帰した。だが亀童丸方はこれに応じず、引き続き加賀国を占拠し続けたため、泰高の守護代山川近江守が加賀への入部を企てたが、十月十七日、越前国境付近の江沼郡 橋（現加賀市橋町）の合戦で、教家方の本折勢によつて撃退された。その後も同年暮から翌三年七月にかけて、管領細川勝元は、不法に加賀を占拠し続ける成春・本折氏等の追討を泰高に命ずる一方で、幕府奉公衆の朽木高親や敷地家澄等に、泰高方への支援を求めていた。ついで文安三年九月に至り、泰高は、本折方を越中に追つたが、翌十月、本折勢は再び加賀に攻め入り占領した。そのため同四年五月、幕府は亀童丸を北加賀、泰高を南加賀のそれぞれ半国守護に補任することで、両派の抗争の収拾をはかった。しかし加賀を実効支配してゐた成春・教家・党の本折氏らは、これに不満を持ち、事態の混迷は続いた。（東四柳史明）

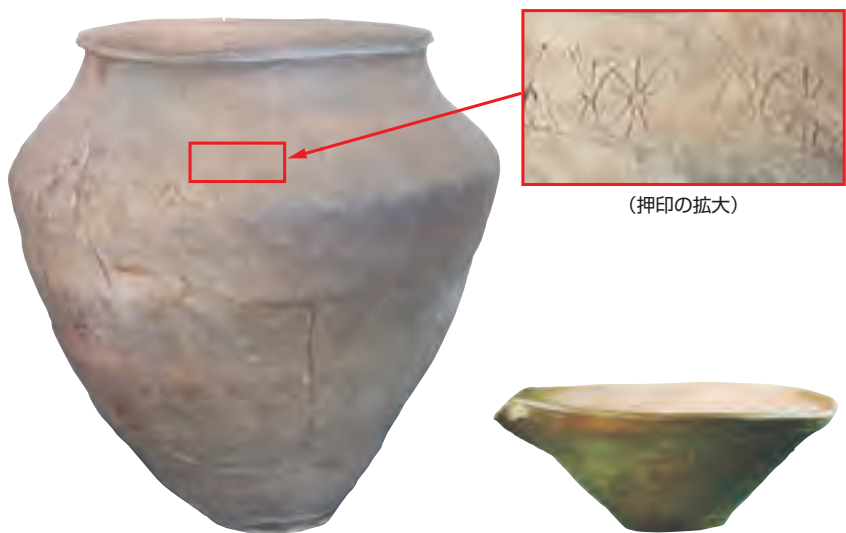
加賀焼の生産と流通

平氏一門が加賀の国主を務めていた
平安時代の末頃、粟津温泉に近い丘陵



加賀焼を生産した窯跡 那谷ダイテンノウダニ2号窯跡は、焚口の奥で炎を左右分け、天井を支えた柱が良好な状態で残り、加賀焼の窯跡として注目された。

地で、赤く焼き上がった加賀焼の生産が開始した。その製品は、日常生活などに使用された陶器の甕や壺、播鉢などで、加賀の国内で高まった需要から、尾張の常滑焼の窯場から職人を呼び、新しい製陶技術を導入したものであった。これよりも以前、加賀地方でも常滑焼の甕は流通していたが、その消費者は国衙に近い荒木田遺跡や、荘園の政所が置かれた白江梯川遺跡に住宅を構えた在地の領主などに限られていた。また、能登半島の先端部で中世の須恵器生産を開始していた珠洲焼も、加賀の村里へ甕や壺、播鉢な



(押印の拡大)

那谷ダイテンノウダニ2号窯の大甕と播鉢 淡い橙色の焼物で、大甕は口径56cm、高さ75cmを測る。肩部の押印は、加賀焼独自の車輪状の二重菊花文である。

どを供給していたが、高まる需要を満たすものではなかった。

加賀焼は、このような状況で成立した加賀独自の中世窯業であった。鎌倉時代には、窯場の数も増加し、粟津の東群と那谷の西群に分かれている。大甕の製造技術が向上したことで、甕の

肩に押す木印(押印)の文様も、斜格子文から菊花文、さらには多彩な幾何学文へと発展している。また押印は、職人の印判とみられ、その文様は加賀焼の大きな特徴である。東西の両群で九三種を数える押印からは、東で三系統、西で二系統以上の職人集団が活動したと考えられている。

平安時代末に二ツ梨オクダニ窯跡から始まる加賀焼の生産は、南北町時代まで続き、一四群四六基以上の地下式の窖窯が稼働した。生産した加賀焼の甕や壺は、加賀三湖から梯川へと結ばれた舟運を経て、各地の市庭や町場へと流通した。このため製品の出土地は、加賀地方を中心に越前北部の九頭竜川流域から、越中西部の小矢部川西岸まで広がる。

主産とした大甕は、液体の長期保管に適した容器で、当時、加賀国内でも発達をみせた酒や酢の醸造をはじめ、染め物や死者の埋葬などに利用された。(垣内光次郎)



市庭に置かれた大甕と川舟 『一遍上人絵伝』巻四、部分(神奈川県藤沢市 清浄光寺所蔵) 鎌倉時代の『一遍上人絵伝』に描かれた「福岡の市」では、川舟が接岸する場所の近くで、大甕が売られている風景がみられる。



中世の墓地と加賀焼 南北朝時代の粟津牧姫塚では、加賀焼の大甕を使い土葬していた。また、室町時代の軽海中世墓では、火葬した遺骨を壺や甕に収めていた。

(遺跡に関する写真の提供、対象物の所蔵は小松市埋蔵文化財センター)

中世文芸と小松

小松は中世文芸の豊かな舞台である。



能『安宅』の上演(金沢能楽会提供) 平成4年(1992)3月21日、石川県立能楽堂。弁慶は渡邊容之助師。

能『安宅』は、『蜷川親元日記』に寛正六年(一四六五)観世大夫政盛一座の演能が初見する。作者は未詳である。源義経主従二人は山伏姿で奥州へ落ちのびる途中、源頼朝の命をうけた富樫の某が関守の安宅の関にさしかかる。弁慶は東大寺再建の勧進山伏と名のる。弁慶は富樫と激しく応酬し、富樫は斬ると威嚇する。山伏一行の祈禱による示威に恐れた富樫は勧進帳を読めと迫る。弁慶は往來の巻物を勧進帳として天も響けと読みあげる。しかし強力姿の義経が見咎められる。弁慶の義経打擲、山伏の富樫への詰め寄りで富樫を威圧し、富樫はその氣迫に押され一行の通行を許す。関を離れ一行が主君の非運を嘆いているところへ、



舞の本『富樫』(国立公文書館所蔵)
富樫城で勧進帳を読む弁慶

富樫が現われ非礼を詫び酒宴となる。弁慶は延年の舞を舞い、一行を促し奥州へ下っていく。弁慶の智勇と苦衷、富樫の覇気、義経の忍耐を演じ、緊迫感漲り劇的変転に富む能の雄編で、歌舞伎『勧進帳』など近世文芸に大きな影響を与えた。素材は室町期成立の源義経の伝奇物語『義経記』で、安宅は「安宅の渡り



『義経記』巻七 平泉御見物の事(金沢市立玉川図書館 村松文庫)
「判官その日志の原に泊り給ひけり。あければ、斎藤別当実盛が手束の太郎みつもりに討たれけるあいのいけをみて、あたかのわたりをこえて、祢あがりの松に著給ふ。」とある。

をこえて」とあるだけであるが、『義経記』が描く義経主従の北国落ちで各所で遭遇した苦難を、富樫を登場させ安宅の関に集約したものである。安宅は古代以来海陸交通の要衝で、室町期に安宅湊に関所があったことが、『安宅』の舞台になったとも考えられる。

安宅関址は県指定史跡となっている。

戦国期の幸若舞曲『富樫』では、義経主従は安宅の松に着き、童から山伏禁制の難所富樫の城があると聞く。弁慶は単身富樫城にのり込むが、人相絵図を示され勧進帳を読む。同期の御伽草子に『義経北国落絵巻』などがある。

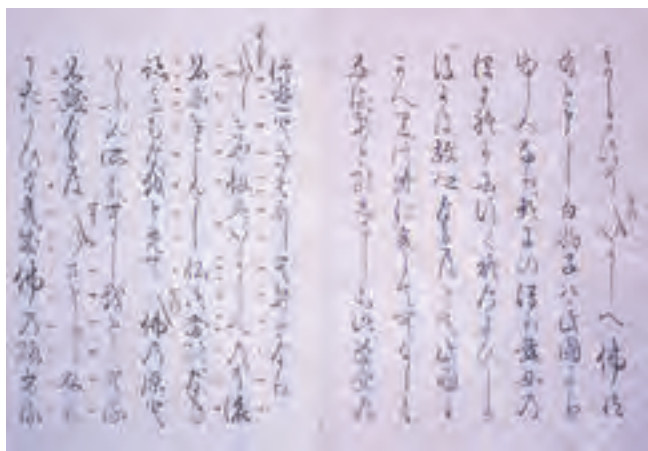
能『仏原』(別名『仏御前』)は、『春日若宮拜殿方諸日記』に、宝徳四年(一四五二)観世元重(音阿弥)の演能が記録される。作者は未詳である。

白山禪定を志す都の僧が、加賀国仏の原の草堂で里女に出合う。里女はこの地で没した仏御前の供養を乞い、仏御前の話を語り消える。僧が弔い仮寝をすると、夢の中に仏御前の霊が現われ舞を舞って消える。幽艶な作である。

典拠の『平家物語』では、平清盛の寵愛が祇王から白拍子仏御前(語り系本では加賀国のもとする)に移り、仏御前は栄耀するが、世の無常を悟り尼となり、祇王姉妹と母が隠棲する草庵を訪ね、ともに仏道に励み往生を遂げたとある。十四卷本『地藏菩薩霊験記』



光悦本 謡曲『佛之はら』 江戸時代初期 本阿弥光悦(ほんあみこうえつ)らが共同で制作出版(個人蔵)



など、加賀での伝承からの作能も想定される。同材に能『祇王』、御伽草子『祇王』がある。(清水郁夫)

時衆と実盛供養の起源

平成十七年（二〇〇五）五月十三日、
時宗総本山 清浄光寺（神奈川県藤沢市）

市（の遊行七十四代他阿弥陀仏真円は、多太神社（小松市上本折町）を訪れ、木曾義仲が寄進した斎藤実盛着用と伝えられる兜（国重文）を回向した。この実盛供養は、遊行上人が一度の遊行の際、当地で行う習わしであり、歴代上人が



（『金沢市史通史編1』より転載）

市（の遊行七十四代他阿弥陀仏真円は、多太神社（小松市上本折町）を訪れ、木曾義仲が寄進した斎藤実盛着用と伝えられる兜（国重文）を回向した。この実盛供養は、遊行上人が一度の遊行の際、当地で行う習わしであり、歴代上人が



「遊行縁起」に見える太空の実盛供養（神奈川県立歴史博物館蔵）
「遊行縁起」は、遊行13代尊明・14代太空・15代尊恵の事績を詞書と絵で描く。この場面は、特に注目される太空の実盛済度の逸話の描写部分。框の付いた台で念仏を説く太空の前に現れた白髪の老人が、実盛の亡霊。「時衆過去帳」の太空条にも、「真阿弥陀仏」（裏書「斎藤別当」）の名が記されている。

奉納した回向札が多数保存されている。

鎌倉時代、新しい念仏信仰普及の担い手の一人として登場した一遍のあと、二代遊行上人となった他阿弥陀仏真教は、正応四年（一二九二）八月、加賀国今湊（現、白山市湊町）で破戒無慚にして邪見放逸で恐れられていた小山律師という武士を教化した。これが遊行上人による加賀国での最初の事績として知られる（「遊行上人絵」）。

以後、北陸道沿いの市場・宿場を中心に、時衆道場が開かれていった。小松市域では、安宅に二つの道場（相応寺・宝界寺）があり、三日市で知られる本折などにも時衆が居住していた



遊行上人回向札（上本折町 多太神社所蔵）
歴代の遊行上人が奉納した回向札が、現在も多数保存されている。

ことが、歴代の遊行上人が携帯したという「時衆過去帳」などからわかる。ところで、遊行上人による実盛回向の起源は、室町時代の十四代他阿弥陀仏太空が加賀国に遊行した際のエピソードにあると思われる。それは、応永二十一年（一四一四）五月、太空が柴山潟の西岸潮津（現、加賀市潮津町）の道場（西光寺）で布教し、義仲軍の手塚光盛に篠原で討たれた実盛の亡霊に念仏を授けて済度したというものであり、この話は都にまで伝わり、醍醐寺三宝院の満済の日記にも記された。この話をもとにして世阿弥元清が猿楽能「実盛」を作成・上演したため、さらに広く知られるようになった。



遊行74代上人真円による実盛供養（平成17年5月13日、多太神社にて）
実盛の兜を回向する遊行第74代他阿弥陀仏真円上人。上人は、参列の市民らに念仏札も配った（賦算という）。この回向は、前回の昭和31年（1956）4月21日、71代隆宝以来、約半世紀ぶりであった。

数の中世埋納銭も時衆による実盛供養の興行銭が奉納された可能性が指摘されて、遊行上人による実盛回向はそうした歴史的背景を踏まえることにもなるのである。（室山孝）

戦国小松を旅した人々

中世の南加賀を往来する街道には、海岸沿いを走る浜通り道と、内陸の平野部を通る中通り道があった。柴山・



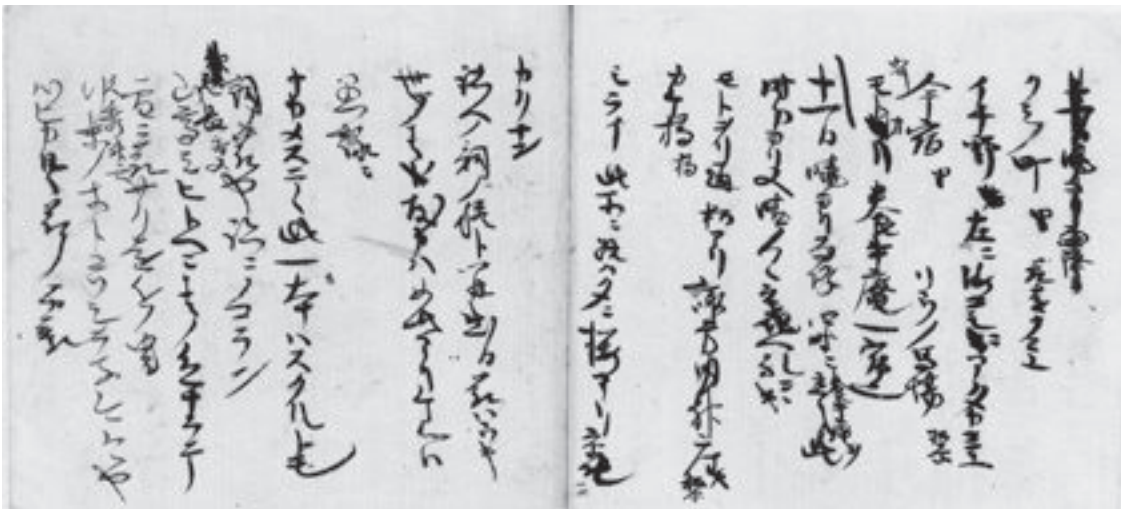
本折町現風景 中世の本折は加賀絹と呼ばれた絹織物の産地で、南加賀の流通の拠点であった。近世まで本折とは、通称橋南地域全体をさした。

今江・木場潟の間を抜け、加賀絹の産地であった本折にいたる中通り道は、主要な街道として、記録にのこるようになる。みずから旅して記録した人物に、聖護院道興（『廻国雜記』）と冷泉為広（『冷泉為広卿越後下向日記』）がいる。聖護院門跡の道興は、文明十八年（一四八六）六月関東・東北に向う途次に訪れた。越前から加賀に入り、橘・敷地・弓波・動橋をへて本折に着くと、絹を織る人を見て和歌を詠んだ。たれかもとをりそめつらんよこびをくわふる国のきぬのたてぬき



天文15年(1546)5月16日 室町幕府奉公人奉書(京都大学総合博物館所蔵) 中通り道の矢田から串付近に所在した公家の中院家領額田荘(小松市額見町を遺称地とする)をめぐる文書。戦国時代、中院家の当主が在荘して経営に当たった。彼らも旅する人々であった。

月、越後に下向する管領細川政元一行に加わり通過した。十日に吉崎坊を出立し、やがて右に津波倉を見遣りながら弓波をへて、動橋から高塚・矢田・串の町に入り、イチ野・今宿・龍ノ



冷泉為広卿越後下向日記(冷泉家時雨亭文庫所蔵) 延徳3年3月11日条 為広は細川政元と親交があり、そのため越後の下向に同道したのである。本日記はこの際に自筆で記録や詠草の草稿、雑記を記したものの。

馬場から本折養牛庵で一宿した。翌十一日は諏訪明神の社叢を見ながら梯川に架かる梯橋を渡り、白江の桜をながめて一首を詠んだ。

ながめすてて此一本はすぐるとも
詞の花や跡にのこらん

さらに開発から浜通り道へと進んだ。



歴史の道調査報告書第1集『北陸道(北国街道)』(1994年)より

帰途は四月十九日野々市から安宅に入り、聖興寺で一泊し、浜通り道を進んでいる。道興・冷泉為広の歩んだ本折の繁栄が、中通り道を盛んにしたのであった。さらに養牛庵・諏訪明神という寺社に参詣を呼び、白山に人々を向かわせたのである。(木越祐馨)

文明の一揆と蓮台寺城

小松市域での本願寺門徒の初見は、長祿元年（一四五七）の銘を持つ光明本

尊を安置した新保の性善である。やがて文明三年（一四七二）加賀界の越前



石川県指定文化財 光明本尊（春木盛正家所蔵） 光明本尊とは、名号から放たれた光明のなかに、釈迦・弥陀二尊、インド・中国の高僧、聖徳太子と待臣、日本の先徳像を描く本尊。性善は越前本願寺門徒の松任本誓寺の弟子であった。

国吉崎に本願寺八代蓮如が坊舎を構えて布教を本格化すると、門徒の拡大をみた。同六年七月、同じ真宗の高田派門徒との争いがおこるようになった。高田派門徒は西軍に属する守護富樫幸千代に一献料を贈り、本願寺門徒の成敗を依頼した。いっぽう本願寺門徒はみずからの立場を正当化するため、足利義政より奉書を得たのであった。この動きに蓮如は幸千代の兄で、山内（白山麓）に逼塞していた富樫政親と結び、合戦を不可避として、仏敵との戦い、私ならぬ戦いと主張した。本願寺門徒は一揆を結び、蓮如の主張が国内の諸勢力に受け入れられると、「加州一国之土一揆」が成立した。政親配下の本折道祖福も加わっていた。戦いは十月になると激しくなり、山

内を出た政親は白山本宮を味方に付けて、一揆とともに幸千代方の拠点である蓮台寺城を陥した。幸千代方は敗北し、一揆・政親方の勝利となった。

この戦いは加賀における最初の一向一揆であり、文明の一揆と呼ぶ。

蓮台寺城は、現在の小松市蓮代寺町に所在したが、明治初年にはもはや推定地が不明であった。

明治の地誌『皇国地誌』にみえる小字「代ノ山」が有力視されている。蓮代寺は山内に入る諸口の一つで、要衝であったことから、幸千代方の拠点となったようだ。



蓮如影像（小松市上本折町 長円寺所蔵） 別装の裏書によれば、応仁2年（1468）54歳の時に描かれた蓮如の寿像（生前の影像）である。



白山宮荘殿講中記録（白山市 白山比咩神社所蔵） 文明の一揆を記した貴重な記録。蓮台寺城の陥落は10月14日であった。

ついで同七年、勝利した一揆の一部は政親方と合戦に及び敗北した。蓮如は戦いに関与しなかったが、責任をとって吉崎を退去した。やがて能美郡の一揆は、能美郡一揆・能美郡中と呼ばれ、地域の秩序維持に力を及ぼすようになった。



蓮台寺城跡（小松市蓮代寺町） 山中に城があった。

波佐谷松岡寺と能美郡門徒

戦国時代の小松市域には、注目され

る真宗寺院として松岡寺があった。

室町時代、本願寺は北陸地方と深い

関係をもつようになっていった。加賀では十五世紀前半、石川郡に吉藤専光寺・宮腰仰西寺、河北郡に木越光徳寺といった寺院が創建され、本願寺第六代巧如の次男如乗が河北郡の二俣坊を本泉寺と号するようになった。

文明三年（一四七二）に本願寺第八代蓮如が越前吉崎（福井県あわら市）に坊舎を建立して布教を始める、加賀においても本格的に本願寺の勢力が広がっていった。

このようななか、蓮如の



小松市松岡町にある松岡寺跡（古名称は「ふるや」）



小松市波佐谷町にある松岡寺跡 手前峰続きに波佐谷城があった。

三男北隣坊蓮綱（兼祐・一四五〇～一五

三二）は、兄で二俣本泉寺の住持であった蓮乗（蓮如次男）に招かれて、能美郡池城（池城町）に坊を開き、次いで古屋（松岡町）に移り、さらに文明十年頃に波佐谷（波佐谷町）に移ったとされる。蓮綱は、古屋の地名を松の木が多いことにちなんで松岡と改称したことにより、その坊を「松岡寺」と称したという。

松岡寺蓮綱は、「波佐谷殿」「蓮谷殿」と称され、若松本泉寺蓮悟（蓮如七男）・山田光教寺蓮誓（蓮如四男）と

ともに「加州三カ寺」「三山の大坊主」

などと呼ばれ、本願寺門主の血統につながる一家衆寺院として、加賀における本願寺門徒の中心的立場にあった。

また、能美郡山内の鮎滝（白山市）

に支坊を開くことにより能美郡における地位を確固たるものとし、能美郡の本願寺門徒を糾合していくこととなり、加賀一向一揆における能美郡一揆を先導するようになった。

松岡寺は、享祿四年（一五三二）の一揆（享祿の錯乱）で敗

北して、蓮綱らは没したため中絶した

が、蓮綱の孫実慶の子顕慶が能登国珠洲郡松波（能登町）の高福寺に入り、江戸時代になって松岡寺とされた。

（岡村喜史）



蓮綱影像（能登町 松岡寺所蔵）



能登町にある松岡寺

越前朝倉氏と南加賀の攻防

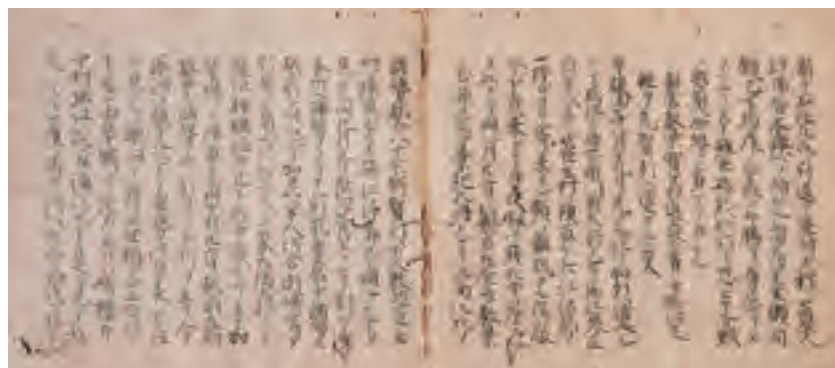
戦国時代の当市域を含む南加賀は、隣国越前の守護朝倉氏の侵攻にしばしば悩まされた。永正三年（一五〇六）の北陸おける一向一揆の一斉蜂起に際し、能美・江沼両郡の本願寺門徒を中心とする加賀の一揆勢が、越前の真宗の大



（永禄3年）10月13日付朝倉義景感状写（金沢市立玉川図書館所蔵）

坊主を支援するため九頭竜河畔にまで攻め入った。しかし朝倉氏はこれを撃退し、越前・加賀国境の海陸に関所を設け、北陸道の往来を一時遮断した。享禄四年（一五三二）、加賀国で一向一揆体制の主導権をめぐり、本願寺一家衆の「加州三カ寺（松岡寺・光教寺・本泉寺）」と越前から同国に亡命していた藤島超勝寺・和田本覚寺の間で抗争が起こった。このとき朝倉氏は、江沼郡山田の光教寺顕誓に合力を申し入れ、同年九月、一族の朝倉教景（宗滴）を大将として、三カ寺派救援のため南加賀に軍勢を進め、能美郡本折（現小松市市街地）に陣を布いた。

教景軍は、十月二十六日、本折を發つて手取川を超え、石川郡に攻め入ったが、やがて戦局の変化により、陣を



『賀越闘諍記』巻1 朝倉教景賀州進発之事伝々（「本折へ陣替ソアリケル」の記事）（金沢市立玉川図書館所蔵）



朝倉義景画像（心月寺所蔵／福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館提供）

撤して越前に帰った。朝倉軍が加賀に出陣した背景には、加州三カ寺が、当時越前朝倉・能登畠山氏などの北陸守護勢力と友好関係にあり、殊に能美郡波佐谷の松岡寺蓮網と朝倉氏は、数年来親しい間柄という事情があった。

一揆との抗争に決着をつけるべく、一門の長老宗滴を大将に、軍勢を江沼郡に侵攻をさせ、一揆方の大聖寺・日屋城を落した。しかし宗滴が陣中で病氣になったため、同年八月、同郡敷地付近を占拠したまま越前に帰陣する。

だが郡内の各地で以後も朝倉・一揆方双方の戦闘は続いており、九月中旬には、同月八日に一乗谷で逝去した宗滴に代わって、朝倉軍の大将となった朝倉景隆が、江沼郡の那谷・粟津に進撃し、各所を放火したが、一揆勢の抵抗はみられなかった。ついで十月になると、朝倉方の山崎吉家の手勢が、能美郡安宅に攻め入って放火し、周辺部を占拠した。だが翌二年春に至り、將軍足利義輝の調停で、朝倉氏と一向一揆の間に和談が成立し、朝倉景隆勢は加賀から退去して越前に帰った。

その後、永禄七年（一五六四）に、朝倉勢の侵攻がみられ、九月十七日には、加賀に下向していた本願寺内衆下間頼良の率いる一揆軍と朝倉勢が、能美郡の本折・小松や江沼郡の鷯谷口



朝倉軍に攻められ放火された那谷寺の周辺 右上部に那谷城があった。

などで激戦を展開し、朝倉方の鳥居与一左衛門尉らが戦功を上げ、越前に帰国後、義景から感状を得ていた。さらに翌八年四月十六日にも、朝倉勢が南加賀の本折・小松・片山津に陣を布いたが、加賀の一向一揆方は、動橋・御幸塚で朝倉方の兵糧を奪い取るなど攻勢に転じたため、同月二十四日、越前に帰った。

（東四柳史明）